
指

山羊ノ宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】 指

【Nコード】

N2052I

【作者名】

山羊ノ宮

【あらすじ】

かーごめかーごめ かごのなかのとりーはいーついーつでーやーる
よあけのばんに つーるとかーめがすーべった
うしろのしょうめんだーれ？

かーごめかーごめ かごのなかのとーりーは
いーついーつでーやーる
よあけのばんに つーるとかーめがすーべった
うしろのしょうめんだーれ？

小林智子は奥の部屋から聞こえるかすかな歌に誘われて、きしむ床を踏みしめていた。

ぼんやりとした明かりがその部屋には灯っていて、障子をあけるとそこには少女が座っていた。

薄暗い部屋の中で少女の白粉の顔が浮いたように存在している。

唇にさした朱は艶めかしく、その唇で紙の風船を膨らましていた。

ふうつと少女が息を入れると、かすかな音を立てて形を変えた。

少女は風船を膨らますと、智子の方へ転がした。

智子は転がってくる紙球を無造作に拾い上げると、少女を見た。

少女は微笑む。

「いらつしゃい。貴方はどんな願いを叶えて欲しいの？」

少女の問いかけに智子は紙でできた風船を見つめ何かを考え込んでいる様子だった。

それから紙風船を爪で切り裂き、少女に歩み寄った。

智子は目覚めると、携帯のアラームを止め、けだるい体を起こした。メールの着信があった。

雅敏からだ。

今から酒を飲まないかという内容だった。

こんな休みの朝っぱらから一体どうしたのだろうと、智子はぼんやりとした思考で考えるが、結論は出ず、雅敏の誘いに乗るという内容を返信した。

それから智子は身支度をし、家を出た。

とりあえず家から電車で十五分ほどのところにある雅敏の家に行くことにした。

雅敏の家の扉を開くと、すごい酒気がした。

「いあっしやーい」

中から赤い目のした雅敏が出てくる。

「何？ずっと飲んでたの？」

「うん。そう。そうなのだ。昨日の晩からずっと飲んでる。それにしてもよく来てくれた、心の友よ。まあ、お前も飲んどくれ」
そう言つて雅敏はベットに突つ伏し、飲みさしのビールを智子に勧める。

机の上に散乱しているビールの空き缶を見つめ、智子はため息をつく。

「一体何があつたの？まあ、話ぐらい聞いてやつてもいいけど」

「実はさあ・・・俺振られちゃつて、傷心な訳よ」

「はあ？」

「なぐさめてーつて皆誘つたけど全滅。お前以外誰も来なーい」

「やつぱり私も帰つていい？」

「だめ。お前には酔っぱらいの話し相手になる権利がある。速やかにその権利を行使されたし」

「よく訳わかんないけど、まあいいわ、付き合つてやるわ」

「わーい」

智子はため息を一つ付くと、起き抜けの空腹の胃に気の抜けたビールを流し込んだ。

それから酔つて子供っぽくなった雅敏の愚痴に、智子は時々小突きながらワイワイと楽しい時間が流れた。

「それにしてもさ。何でお前は俺にこんなに付き合つてくれるの？」
この質問が出るまでは。

「もしかして俺のこと好きなの？」

雅敏からして見れば、それは些細な冗談だった。

だが、その場の空気は凍りついてしまった。

二人が視線を絡ませ、沈黙を紡ぐ。

「もしそうだと言ったら？」

智子の真剣な質問がえしに、雅敏は酔いがさめたように目を見開いていた。

そして、雅敏は考え込んだ。

果たしてそのアルコールでマヒした脳みそでちゃんとした思考ができるものか疑問ではあるが。

「そうだな。付き合ってみるのもいいかも・・・」

「そう」

智子は少し自嘲気味に笑って、左手をさすった。

そこにあつたはずの指を愛おしそうに。

「どんな願いでも叶うの？」

「さあ、願い事によりけりよ」

「私には好きな人がいるの。でもその人には恋人がいて、私の願いはその人を私だけのものにしたい。この願いは叶うのかしら？」

「叶うわ」

「じゃあ、叶えて」

手招きする少女。

智子はそれに応じ、少女の前に座った。

少女は智子の左手を取り、台の上に置いた。

そして、智子の手の上に赤い布をかぶせる。

小指だけが隠れずに台の上にその存在をさらしていた。

「一体何をするの？」

「小指を落とすわ」

そう言つて少女は短刀を取り出した。

ぎよっとする智子。

「どうする？ やっぱりやめておく？」

「・・・いえ、やるわ」

智子は自分の小指を見つめていた。

第一関節が内に曲がり、爪は大きいがこの頃手入れするのを忘れて
いるせいであまりきれいとは言えない。

どうせお別れするならちゃんと手入れしておけばよかったと智子は
思った。

「いくわ」

少女は短刀を振り下ろした。

小指が智子の身から離れ、鋭い痛みに智子は少女を睨んだ。

「貴方はうまくいくと良いわね」

少女は微笑んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2052i/>

指

2010年10月10日06時08分発行